

2025年度日系社会研修 コース概要

N0.	3
所管センター	中国
分野	日本文化
研修コース名（日）	伝統文化である陶芸による地域ブランドの創出と地域の活性化
受入人数	2
受入時期	上半期
来日日	2025年7月13日（日）
帰国日	2025年8月9日（土）
提案団体（日）	（公財）ひろしま国際センター 研修部
提案団体 ウェブサイトアドレス	https://www.shunyoshinopotteryworks.com/
研修員必要資格	○必要資格：年齢21～50歳○日本の陶芸技術・文化に高い関心があること。
研修員に必要な 実務経験年数	不問
日本語能力（選択） ※日本語能力試験認定の目安参照	N5
英語能力（選択）	不問
研修目標	○日本の陶芸技術から、母国の技術の改善点を考える契機とする。 ○「工房 一会」における実習を通して地域リソースを活用した地域特産品の製造、販売、展示会、他業種（飲食店等）とのコラボレーション、マーケティング等の取組みを学び、帰国後の日系社会における地域資源の再発見・活用につなげる力を養う。 ○「工房 一会」以外にも、地域再生に取り組む人々との交流を通じて、地域課題解決におけるアーティストとしての観点での主体的な関与の大切さや地域活性化の方策について知見を得る。例えば、日本の伝統的な技術である、金継ぎを体験することで、日本人の物を大事にする精神、長く使う事やその経年変化をも慈しむ美德を持ち帰って広めてもらうなど、陶芸から派生する日本文化を学び手法を得る。
期待される成果 （習得する技術）	○「工房 一会」は、陶器だけではなく、鞆のデザイン制作、店舗デザインをプロデュースするなど幅広い活動をしている。その成功事例を学び、地域リソースの再発見と活用、地域特産品開発を通じた地域課題の解決、地域再生の知見が習得される。 ○「工房 一会」が過疎化の進む因島の風情・風土からインスピレーションを得て活動展開していることから、日本の地方のコミュニティにおける課題（人口減少、アイデンティティの喪失、地域資源の活用の重要性およびポテンシャル）が理解される。 ○上記2項を基に、研修員により、自国で応用可能な技術・手法等が整理される。 ○研修員が帰国後の具体的な活動計画を作成する。
研修計画 （内容）	○講義：「工房 一会」における地域特産品開発と地域再生の取組み ○実習・OJT：「工房 一会」における陶芸活動、販売、マーケティング、他業種とのコラボレーション等 ○見学：関連他団体の施設・活動 ○演習：研修成果の取りまとめ ○発表：内部及び関係機関に向けての発表会を実施

本研修実施の意義 中南米日系社会への裨益効果	日本の陶器は、茶道や華道、食文化と密接に関係する伝統工芸の一つであり、芸術品としてだけではなく、日常的に使用するものとしても国内外で幅広い世代に人気が高い。しかし、中南米諸国では、その製造技術が低く、低温で焼くための釉薬として日本ではその危険性から使用禁止されている鉛を使用することもある。日本の技術による、現地における技術改善とそれによる陶芸文化の発展、またそれに関連する食をはじめとする日本の豊かな諸文化を提供することで、日系社会の発展に寄与するものとして今回の研修を提案する。 「工房 一会」の代表の吉野 瞬氏は、益子焼の窯元で修行後、拠点を広島県の因島に移し、そこで得たインスピレーションを元に、プロジェクト「島と縞」を始動させ精力的に活動し、広島を代表する陶芸家として地域再生に大きな役割を果たしている。例えば、地域で取れる原料を使った釉薬の開発や、世界都市広島ならではの目線からアプローチした焼き物の制作を行なっている。具体的には、2019年天皇盃 第25回全国都道府県対抗男子駅伝競走大会優勝・入賞トロフィーを制作した際、広島市より提供された折り鶴（風化により汚れたり傷んだ折り鶴）を釉薬として使用した。これらの活動が評価され、直近では、2023年に行われたG7広島サミットで宮島の岩惣で行われた、主要国首脳会議ワーキングディナーにてプレースプレートを制作し提供し国際的にも注目されている。 本研修では、「工房 一会」における、地域産品を再発見し地域ブランドの創出へとつなげる取組みと地域再生への好循環の実例を学ぶことで、失われつつある日系社会のアイデンティティへの気づきと、地域リソース活用による地域活性化の方策について知見を得ることが可能である。こうした知見の活用によって、若い世代における日本文化の再発見とアイデンティティの強化が促進されるとともに、中南米各国における地域課題の解決に向け、日系社会の若い世代が主体的な取組みを発揮することが期待される。
応募希望者への特記事項	芸術を通じて社会課題解決に取り組まれている方を対象とする研修です。